

白い土偶ができるまで (札幌雪偶プロジェクトリーダー 山内絵里 さん)



2023年制作のイケメン土偶。笑みを含んだ表情がクールだ。

さっぽろ雪まつりにて、土偶や土器をモチーフに市民雪像を作成している「札幌雪偶(せつぐう)プロジェクト」です。雪像作りは今年で5回目を迎え、今回も国内外の多くの方々に見ていただきました。発端は2016年。北海道・東北の縄文遺跡群が“世界文化遺産登録の一步手前”で留まっていた時期でした。その年の雪まつり期間中、赤れんがで開かれていた縄文の講演会を後にした私(山内)は、建物の入り口付近に作られた巨大な雪だるまを目にして、ふと「巨大な土偶の雪像を作ったら、雪まつりに来る人に縄文をアピールできるのでは?」と思いつき、同年12月に募集された2017年雪まつりの市民雪像に応募。運良く12丁目会場の一角を抽選で引き当てることができました。制作メンバーはfacebookを通じて募集し、モチーフはカックウこと中空土偶にチャレンジ。初めての制作に加え、土偶特有の微妙な曲線や複雑な文様ゆえ作業量が多く、時間に追われての制作でしたが、最終的には迫力満点の雪像を完成させることができました。翌年からは遮光器土偶、火焰土器、ハート型土偶with角偶などを制作し、メンバーの技術も向上していきました。コロナ渦を経て2年ぶりとなる今年は、感染症防止のために制作期間が例年の5日間から3日間へ減少。短時間で仕上げるためには、曲線よりも直線や平面が多く、複雑すぎない土偶選びが必要でした。チョイス

したのは札幌N30遺跡出土土偶、通称「イケメン土偶」。中空土偶などに比べると知名度は低いものの、切れ長の目に高い鼻梁、少し笑った口元とそのハンサムぶりは土偶界のトップクラスに入る逸材です。

1日目に形を完成させ、残り2日で細部や文様を作り込む計画のもと制作開始。初日は9割程度まで形を削りだせたものの、日没後に急激に気温が低下し、作業を中断。暖かすぎると雪像が脆くなり、寒すぎると手足が冷えて作業が遅くなり…と、進行は天候にも大きく左右されます。2日目以降は幸い気温が高めで、文様や顔などの細部まで作り込みました。今年は文様に加えて身体全体に入るヒビや顔の細部をリアルに再現することができ、予想以上の仕上がりとなりました。

完成後は約1週間の短い展示期間を楽しみます。観光客に紛れて雪像を見にいき、リアルな反応を楽しむメンバーも多く、中には海外の人たちに英語で土偶の説明をする猛者もいました。時間帯や天候によって雪像の見え方も変化し、最終日までさまざまな表情を見せてくれました。

最も寒い時期に雪像を作るのは楽なことではありません。しかし制作を通して感じるのは、計算し尽くされた造形美や緻密な文様など、縄文人の美的センスの素晴らしさです。そしてその美的センスを持っていた縄文人も、きっと雪で土偶的なものを作っていたに違いありません。年々深まる縄文愛、土偶愛を胸に、今後も体力が続く限り「雪偶」作りを続けていきます。



2017年制作の中空土偶。腰のくびれと逞しい肩が「セクシー」と話題に。



HOKKAIDO JOMONCLUB NEWSLETTER

巻頭あいさつ

北の縄文道民会議
副代表 越田 賢一郎

札幌国際大学 現代文化学科 教授
札幌国際大学 縄文世界遺産研究室 室長
北海道世界文化遺産活用推進実行委員会 委員長



海からの視点

2月の中旬に、大阪梅田の地下街「ディーズスクエア」で開催された、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の北海道の構成資産を紹介するイベントに行く機会がありました。JRのほか、阪神、阪急、地下鉄などが交差する梅田の地下街ですから、一日の通行者30万人を謳っています。土・日のイベントでしたからそれほどではなかったようですが、コロナ禍で出渋っていた私にとって、数年分の人の顔を見た気がしました。

イベント会場を通り過ぎる人の中で、多くの人を魅了していたのがレプリカではありますが「カックウ」と「ビビちゃん」でした。カメラを構え何枚も写真を撮っていく方、ビビちゃんについては「これは何?」と質問を寄せられた方も多くおられました。札幌国際大学のトートバックに縄文スタンプを押すコーナーとガチャポンで北海道の産物を当てるコーナーも一時は人の列ができるほどで、予定数を上回りました。

空港からイベント会場へ行く途中、淀川の鉄橋を越えました。最近、マッコウクジラの「淀ちゃん」が迷い込んだところ。大坂は経済の中心地でしたから、北前船の終着地でもあり、北とのつながりを考えてしまいました。「蝦夷地の水は大坂に通じる」ですね。

海を日常的に利用しはじめたのが縄文人たちです。寒冷な氷河期からの温暖化に適応するために、縄文人たちは丸木舟を使って海にのり出し、その資源を積極的に活用しはじめました。貝塚の貝殻、魚や海獣類の骨がそれを物語っています。また、海を越えて、黒曜石、ヒスイ、アスファルトなど多くの物資の交換が行われ、様々な情報も伝わりました。津軽海峡を越えた「北海道・北東北の縄文遺跡群」のまとまりが形成されたのです。

北海道中央バスのシービーアーズカンパニーと相談して、縄文遺跡群から海を見るだけでなく、海から遺跡群を見てみようという企画を考えています。縄文人がどこから海にこぎ出したのか、そして何を目標にしてむらに戻ったのでしょうか。今回は噴火湾の遺跡群を対象にしますが、ここには、秘境駅とよばれた「小幌駅」があります。道路や鉄道を利用する人にとっては「秘境」なのですが、海岸には洞窟遺跡があり、円空仏を納めた社もありました。海を利用する人々にとって、交通の要衝だったのです。

海は今も世界をつなぐ重要な道です。あらためて「海からの視点」を考えてみたいのです。



編集

後記

・会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。侍ジャパンが第5回WBCで悲願の世界一奪還を遂げ、つい「最高です」と叫んでしまいました。

さて、『北の縄文』春号の発行にあたり、越田賢一郎当会議副代表をはじめ荒川裕生当会議代表、北海道遺産協議会様、札幌雪偶プロジェクトリーダー・山内絵里様からご寄稿いただきお礼申し上げます。2020年にパンデミックが始まってからほぼ3年、コロナ禍ようやく終わりが見えてきたようです。今、道内各地で縄文のイベントが催され、縄文LOVEな市民のパワーが炸裂しています。編集部一同、「縄文パワー全開」で北海道の縄文の価値や魅力の発信に努めてまいります。(T・H)(U・A)(Y・T)

編集・発行：世界文化遺産登録の縄文遺跡群と全北海道の縄文遺跡群の活用を推進する道民会議

編集長 谷 紘道 編集委員 梅田 彩加、依田 妙恵

TEL: 011-221-1122 FAX: 011-221-0117 <http://www.jomon-do.org/> E-mail ebisutani@chuo-bus.co.jp

縄文ロマンの里「に～よんフェス」に参加しました。



札幌市北区にある「北24条商店街」では、2年前の春から、縄文をテーマに元気な商店街づくりを展開しています。

3月4日(土)、一昨夏に続き、2回目の開催となった「に～よんフェス」に、当会議も後援団体として参加、縄文のPRを行いました。

会場には、日頃から縄文愛あふれる活動を展開している「ドニワ部」や「いるば28」をはじめ、北24条商店街の皆様が土偶グッズや書籍、くるみの最中やパン、オリジナル焼酎など、縄文にちなんだアイテムが勢ぞろい。また、ミニ土器や縄文コースターづくり、粘土などのワークショップ、北24条のスタッフさんが考えた縄文クイズも大好評。当会議が作成した「土偶ぬりえ」も楽しんでいただきました。

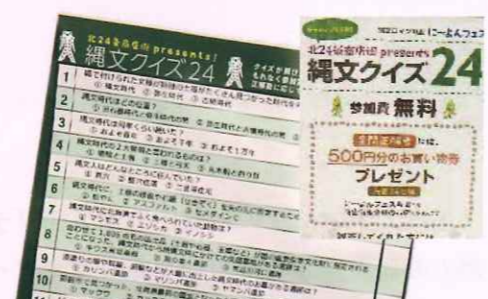
また、「縄文時代、ウクライナでは・・・」と題した【縄文カフェ・特別対談】では、ウクライナ出身の北海道大学の留学生・アンナさんと、当会議JOBON編集チームの「縄文沼の女神」(自称)の対談も行われました。



会場は大賑わい。商店街の小泉理事長も大活躍。



子供に人気のワークショップ。



縄文グッズが勢ぞろい



道民会議のぬりえコーナー



商店街のお買物券が当たる【縄文クイズ】は本格的。資料を調べて必死に答えるみなさん。

縄文時代のウクライナ

クテニ・トリビツリヤ文化



縄文時代のウクライナと日本を比較しながらの楽しいトーク



満席の会場。当会議の専門アドバイザー阿部千春先生からもコメントいただきました。

【縄文時代・ウクライナでは?】

ウクライナ出身の北海道大学留学生アンナさん × 縄文沼の女神 (当会議JOBON編集チーム)

アンナさんから、日本の縄文時代に、ウクライナにも土器や土偶をつくり自然に感謝しながら暮らした「トリビツリヤ文化」があったことを紹介していただきました。

ウクライナは広大な穀倉地帯で、当時もすでに穀物を栽培、一方で日本は海に囲まれ平地が少ないので、狩猟・漁労・採集を長く続けていたことは、異なる部分ですが、どちらの地域も自然や命を大切に、すべてのものに感謝していたことは同じです。現代を生きる私たちは、土偶や遺跡から当時の人々が伝えてくれるメッセージをしっかりと受けとめたいと実感しました。

「北海道遺産ラッピングバス」を発表 (北海道遺産協議会)



北海道遺産協議会では、2023年1月18日に「北海道遺産ラッピングバス」を発表しました。このバスは、2021年度の北海道遺産

20周年記念事業として企画し、北海道中央バス株式会社のご協力のもと製作したものです。

青空に映える赤い車体の大型バスに、「螺湾ブリキ」や「しかべ間歌泉」、「むかわ町穂別の古生物化石群」の通称・『むかわ竜』など、北海道遺産らしい特色ある写真を配置して、皆さんに楽しんでいただける車体になったのではないかと思います。

その中でも、「内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群」の『中空土偶』は、静かに道行く人々を見守るように、車体の左後方にたたずんでいます。大きなバスの車体に配された姿は、堂々としていて文様の巧みさや美しさもしっかりと見て取ることができます。

中空土偶は3000年以上前に暮らしていた人々の手

でつくられたものと言われています。そう考えると、その当時の人々がみつめた造形を、今の私たちもみつめているのだということに気づきます。数千年の時を超えた、人々の共有財産を多くの人々にみていただくことができればと思います。

北海道遺産は、歴史的な価値の高いものや、暮らしてきた人々が作りだした文化、北海道ならではの自然など多岐にわたります。そのどれもが人々が次の世代に伝えていきたいとの思いをこめて、地域で守り・活用し・未来に向けて送り出していく取組がされているものです。数千年前の人々の宝物が時を超えてきたように、この地に生きる私たちの宝物を未来の北海道人に伝えていくことができるよう、「北海道遺産ラッピングバス」を活用して、全道各地に北海道遺産の魅力を広げる取組を行っていききたいと思います。



左から、北海道中央バス(株) 二階堂社長、北海道 鈴木知事、北海道遺産協議会 石森会長

ぬりえがダウンロードできるようになりました。



昨年12月にデビューしたぬりえを、北の縄文道民会議ホームページから無料ダウンロードが可能になりました!ぜひお楽しみください

※イラストの著作権はドニワ部に所属しております。印刷・ご利用の際は、改変やキャプションの削除はご遠慮ください。

ダウンロードはこちらのURLから「<https://www.jomon-do.org/news/2089>」